

スタンフォード大学での1週間の研修は、私の人生の中に大きな財産を築き上げたことを、まず冒頭にて報告したい。

私の今回の参加目的は、世界の医療を牽引するスタンフォード大学のスペシャリストの先生方が、どういったビジョンで先を見据えているのかを知ること、私自身画像センターで働いていることもあり、米国の画像センターとの違いを学ぶこと、そして今後研究者として精進していくための自己啓発、の主に3つである。MRIではDTIやfMRIの情報を複合的に表示するConnectome、分子イメージングではPhotoacoustic ImagingやNanotechnologyによる検出能 0.1^3mm^3 への挑戦、さらにはPET/CTにおける様々なトレーサーの開発やFDGとNaFの混合投与、DNAをターゲットとしたFLTなど、スペシャリストの先生方の明確なビジョンや熱意に、自身の専門分野は当然のことながら、専門外の分野においても自分の期待していた以上の刺激を受けることができた。その中で、自分の価値観や視野の狭さを痛感すると同時に、日に日に自らが変化していくのを感じる事ができた。先生方との日々の質疑応答において、先生方の配慮により一方通行とならない意見交換ができたことも、期待以上の成果が得られた理由のひとつである。また、画像センターの見学においてはマネージャーの方と直接意見交換をすることができ、医療保険制度の違いがもたらすマネジメント手法の違いや患者サービスの違いなど、日本とは異なる様々な側面を肌で感じる事ができた。

今回の研修を通して最新の知見を習得できたことや、刺激を受けることができたことも成果のひとつであるが、それ以上に、『仲間』という大きな財産を得ることができた。同じ志をもった20名の仲間である。異なる専門分野、異なる年齢層の中で、すべての壁を取り払った日々のディスカッションを通して共に過ごした時間は非常に貴重なものであり、私自身を大きく成長させていただき、私の人生において大きな財産となった。世界観が変わったのは私だけではなく、ともに同じ時間を過ごした仲間もまた同様であると思う。今後は、今回出会った仲間との繋がりの中で、単なる研究者同士の繋がりではなく、同じ世界観をもった研究者として互いに切磋琢磨し、親交を深め、互いに持つ世界観をさらに広げていくことができればと考える。

今回の研修においては、日本と米国の技師の違いについても考えさせられた。米国においては、放射線技師ひとつとってもClinicalの技師とResearchの技師とに分かれる。しかしながら、日本においてはClinicalの技師がResearchも行っている姿がほとんどである。その中で、日本の放射線技師のあるべき理想像を述べるとするならば、個人的にはClinicalの技師がResearchも並行して行っていくことが理想像であると考えている。Clinicalで疑問を抱き、Researchを行い、その結果をClinicalへ還元する。我々が日頃提供している医療は、最善を尽くしたものを提供できているかどうか。専門性は違えど、このClinicalとResearchのサイクルを途切れることなくスムーズに回し、for the patientにつなげることが重要であると考えている。ボタンを押すだけが放射線技師ではなく、“診療”放射線技師とするならばなおさらではないだろうか。研修中にも同様のディスカッションが行われた。理想を描く上で環境の違いによる様々な弊害もある。しかしながら、そのディスカッションの灯を消さないでいることは、ゆくゆくは放射線技師の地位向上にもつながっていくものであると考える。

最後に、本研修にご尽力頂いた日本放射線技術学会、スタンフォード大学、GEHCの関係者の方々はもとより、研修がより有意義なものになるよう引率していただいた神戸大学京谷隊長、そして今回の研修への参加に快く送り出していただいた岡山画像診断センター諸兄にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



Photo: Imaging Center 前にて、『仲間』とともに。